

第14回新生匠瑳戦略会議 会議録（概要版）

開催日時：平成24年2月29日（水）

午後7時15分～9時15分

開催場所：八日市場ドーム選手控室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘、萱森孝雄、越川竹晴、越川八代枝、鈴木和彦

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（13人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、橋場永尚

（2人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）木内課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

【 議 事 】

（1）提案書（中間報告）について

- ・2月15日に学識経験者、事務局により中間報告作成に関する打ち合わせを行った。打ち合わせの準備として、第1回～11回までの会議録を読み直し、「戦略会議で話し合ったことによる成果」について、マーカーでチェック。その上で、中間報告作成に向けた基本的考え方を整理し、今後のスケジュールについて確認した。
- ・今後のスケジュールとして、本日の会議で中間報告たたき台の作成、それを基に中間報告（案）の作成、次回3月22日の会議で中間報告（案）の最終チェック、修正を経て3月中に中間報告として市長へ提出する。
- ・中間報告の基本的考え方は、資料「匠瑳市のまちづくり戦略＝“自分たちごと”戦略」の図に集約されている。図の左側は、行政依存、あきらめ感が蔓延している現状を市民がどう発想を変えていくかを示したものである。これらの現状を打破するために、市が抱えている問題を市民が自ら当事者としてとらえ、さらには自分だけではなく、みんなの問題として課題を共有することで、「自分たちごと」の市民によるまちづくりをしていこうというものである。図の右側は、「自分たちごと」の市民によるまちづくりを推進するためには、何が必要で、そのために行政がどう役割を変えていくかを示したものである。あきらめ感が蔓延している現状では、地域が持つ魅力を再認識・共有することが重要で、そのためには、かつての教師やお坊さんが担ってきた文化を讃え合う人（①内なる伝道師）が必要である。また、地域

の困りごとを地元の人たちで抱え込まず、地区外・市外の人（②ヨソ者視点の伝道師）の力を借りることで、外との関係を築く努力も必要である。行政の役割は、①・②を確保しながらそれらを地域に派遣し、問題を解決するための取組みを支援していくことで、今までの官主導のまちづくりから、市民が自ら答えを出せる仕組みづくりを支援することにシフトしていかなければならない。以上のことから、市民と行政が相互に働きかけ、共鳴するパートナーシップを築くことが、これからの匝瑳市のまちづくり戦略＝「“自分たちごと”戦略」であり、本日の会議はこれらの考え方でJ T跡地を見たときに、どういう姿が見えてくるのかを話し合う場であると思う。

- ・ 現在、毎年行っている飯高檀林コンサートは、まさに東京から来たヨソ者の影響が大きい。それがなければ、地元の好きな人だけの集まりで終わっていたかもしれない。
- ・ 地元の人にとってみれば、市には誇れるものがなく、何もないと思っていたところに、市外の人視点から匝瑳市は世界のトウキョウサンショウウオの生息地であることがわかった。これは、地域の困りごとが価値化された例である。
- ・ 今まで、行政が主体的に何かをする立場でしかものごとを考えてこなかった。活動を支援してほしいと市民から相談があったとしても、活動を支援する立場をあまり経験してきていないため、行政がそれにどう対応していいかわからないのである。変えていきたいのは、まさにそこである。
- ・ 中央地区の商店街は、江戸時代から基本的な姿は変わっていない。そのままのかたちで歴史を刻んできてしまったことが、ぬるま湯暮らし、あきらめ感蔓延につながっているのかもしれない。匝瑳市にも立派な文化財等があるのだから、そこへ付加価値をつけてブランド化していくような戦略が求められる。
- ・ ぬるま湯暮らし、あきらめ感蔓延などの現状は、急に出てきたものではなく、そうなった背景、要因が必ずある。それらをまとめたものが、資料「中間報告書 目次案」Ⅱの部分である。
- ・ 近代化とともに、今までは行政だけで解決できた地域の問題が、問題の社会化により行政だけでは解決できなくなってきた。そこで、新しい解決の方法やまちづくりの仕組みということで、市民協働などの考え方が必要になってきている。それが資料「中間報告書 目次案」Ⅲの部分である。
- ・ 中間報告の基本的考え方は理解できるが、結局何に使うかという具体的な答えを出さなければ戦略会議として立つ瀬がないのではないかと、という意見と、考え方を整理して自ずから答えが出る状態を作らなければ、たとえ答えを出したとしても失敗

の繰り返しになるのではないか、という二つの意見がある。戦略会議としての考え方を整理し、それを委員全員が共有できていないと、結局人ごとの報告書が出来上がってしまう。

- どの集落にも内なる伝道師（地域で積極的に活動している人、自分の考えや意見を持っている人など）はいる。ただ、公の場で発言する機会がないだけである。
- 必ずしも「伝道師＝人」と考える必要はなく、意見は持っているけれどなかなか発言する機会がないという人のために、意見表明できる場を作ること自体が伝道師の役割を果たしていると言える。
- 中間報告の基本的考え方については理解して終わりではなく、この考えでJ T跡地をどうとらえるかということに対して、答えを出さなくてはならない。何を造るかではなく、何かを造ることによって市をどう変えていきたいか、あるいは、こういう市にしたいからこれを造ろうとか、結局「何」というのは最後の結論として出てくるものである。そのプロセスを全く経ずに結論を出そうとしているので、まずはそこを考えるべきである。
- J T跡地は市民にとって特に困りごとにはなっていない。ただ、税金が無駄遣いされているということで気になっているだけである。このことだけが問題だとすると、すぐに売却して現金化することが最も有力な選択肢である。
- J T跡地が市民にとって困りごとになっていなければ、選択肢は二つしかないと思う。一つは売却で、もう一つは、自分ごととして利用してくれる誰かを募集することである。
- 自分ごととしてとらえて活動できる人が、市民の中にどのくらいいるだろうか。市民の意識がまだそのレベルに達していないので、ここから市民協働を起こしていくのはかなり難しいのではないか。
- 資料「J T跡地利用に関する7つのQuestion」で見えていくと、まず、市民の中でJ T跡地が問題として認識されていないので、これを自分ごととして共有させなければならない。しかし、放置することで一番困っているのはおそらく市長である。
- J T跡地を放置することで市長が困っているというのも実は疑問で、J T跡地が存在することで困っているわけではなく、議会からの質問に回答ができないことで困っているのだと思う。
- 今まではJ T跡地について、商工会だけ、市役所だけという「閉鎖的な意識」の中で考えられてきたが、もっと広くとらえて、農村部、駅、高校生なども巻き込んで、それらと連携していくことも必要である。
- 中間報告については、戦略会議としてある程度の方向性を出すべきで、具体的にJ

T跡地をどうするかは市長が判断することである。いずれにしても、その内容は市民に説明することになるが、考え方にあまり時間をかけすぎると、結局議論が進まなくなってしまうような気がする。

- ・少なくとも、戦略会議に求められているのは、ある程度具体的な解決策であったことは事実で、具体的な解決策まで提示するのか、それとも、しないのかという結論は出さなくてはならない。
- ・具体的な解決策を一つに絞って示すことはできないが、可能性のあるものはいくつ提示したい。考え方や仕組みづくりがメインになるかもしれないが、そこから応用・発展させて、J T跡地にどういう可能性があるかを探りたい。検討した結果、具体策は入れない方がいいということになるかもしれないが、とりあえず次回の会議までに中間報告（案）を作成し、皆さんにチェックをお願いしたい。

（２）その他

次回以降の会議日程は、第15回（次回）会議が3月22日（木）、第16回会議が4月26日（木）とし、それぞれ午後7時から八日市場ドームで行う。